

「美しい」の都市研究

* 文中敬称を省略します。

都市研究センター 研究理事
渡辺 直行

はじめに

前号に「都市の風景に関する研究」を掲載したところ、「どうも、わからない」というかなり率直なご意見をいただいた。誠に慧眼である。実のところ「どうも、わからない」のが「都市の風景」の本質である。広辞苑によれば、「どうも」とは「はっきりしないが、どことなく」という意味であり、つまり「わかるような気もするがはっきりとはわからない」というのが「都市の風景」なのである。それは何故なのだろうか。

1. 「美しい国づくり」

国土交通省がまとめた「美しい国づくり政策大綱」(2003年7月)は、文字通り画期的な大綱である。以下筆者の解釈により解説すると、「美しい」という修飾語だけを掲げたこと、及びその対象を「国」としたことが画期的である。別稿「都市の風景に関する研究」にとってはこのどちらもが極めて重要であるが、ここでは特に「美しい」について考えてみたい。大綱では前文がとりわけ意義深いので、まずそれを引用する(傍点は筆者)。

前文

戦後、我が国はすばらしい経済発展を成し遂げ、今やEU、米国と並ぶ3極のうちの1つに数えられるに至った。戦後の荒廃した国土や焼け野原となった都市を思い起こすとき、まさ

に奇蹟である。

国土交通省及びその前身である運輸省、建設省、北海道開発庁、国土庁は、交通政策、社会資本整備、国土政策等を担当し、この経済発展の基盤づくりに邁進してきた。

その結果、社会資本はある程度量的には充足されたが、我が国土は、国民一人一人にとって、本当に魅力あるものとなったのであろうか？。

都市には電線がはりめぐらされ、緑が少なく、家々はブロック塀で囲まれ、ビルの高さは不揃いであり、看板、標識が雑然と立ち並び、美しさとはほど遠い風景となっている。四季折々に美しい変化を見せる我が国の自然に較べて、都市や田園、海岸における人工景観は著しく見劣りがする。

美しさは心のあり様とも深く結びついている。私達は、社会資本の整備を目的でなく手段であることをはっきり認識していたか？、量的充足を追求するあまり、質の面でおろそかな部分がなかったか？、等々率直に自らを省みる必要がある。また、ごみの不法投棄、タバコの吸い殻の投げ捨て、放置自転車等の情景は社会的モラルの欠如の表れでもある。

もとより、この国土を美しいものとする努力が嘗々と行われてきているのも事実であるが、厚みと広がりを持った努力とは言いがたい状況にある。

国土交通省は、この国を魅力ある国にする

ために、まず、自ら襟を正し、その上で官民挙げての取り組みのきっかけを作るよう努力すべきと認識するに至った。そして、この国土を国民一人一人の資産として、我が国の美しい自然との調和を図りつつ整備し、次の世代に引き継ぐという理念の下、行政の方向を美しい国づくりに向けて大きく舵を切ることとした。(以下省略)

大綱前文の要点は、筆者の解釈では、次の3つである。

「心」の提示

「美しい」方向転換

「大きく」転換

つまり、心に映る美しさを求める方向へ国づくりの方向を大きく転換したということである。これは「旧標準の見直し」などという事態を遥かに超えたもので、「旧価値観との訣別」とでも呼ぶべき事態である。「2003年夏の大転換」として長く歴史に残すべき事態であると言ってもよい。それ以前の「国づくり」の「方向」を捨てて新たな「方向」へと向かう画期をつくったわけだが、以下では上記3点それぞれについて少し説明を加える。

「心」の提示

「美しさは心のあり様とも深く結びついて」という表現が意味するところは極めて大きい。政策対象を単なる外的な物としてではなく、心という内的なものに関連させて認識したことは、世界観の転倒と言ってよい重大事である。つまり、対象を自己と切り離して客観的に見るという価値観から、対象を自己の心としてとらえるという価値観へ移行した

わけである。「率直に自らを省みる必要がある」という表現も、物を省みるのではなく自分の心、人間の心を省みるということを意味するであろう。

「美しさ」をつくるということは、対象のつくり方という多分に技術的、制度的な外的問題である以上に、「心」のつくり方という内的問題である。そうである以上、物をどうつくるかを考える以前に、人間の心の問題を深く考えなければならない。「美しさ」＝「心のあり様」と言ってもよいくらい後者を考えることが重要である。要するに、「美しい」を新たな方向とするためには、その方向へ体の向きが変わるように心のあり方を変えなければならない。

言うまでもなく、心のあり方は、誰かが変えればよいというものではない。行政だけが変えるなどということは考えられない。市民が皆で変えなければならない。あるいは、既に変わっている人、あるいは元からその方向に心が向いている人に、他の人が学ばなければならない。

しかし、考えてみればこれは変な話である。皆の心が同じ方向を向くなどということが現実には起こりうるとは思われないし、また、仮にそんなことが起こるとしたら、それは全体主義とでも呼ぶべきものであって、極めて気持ちの悪い状態である。皆が皆「美しい国をつくろう」などと声を合わせ出したら要注意である。そのような状態は、市民が自らつくる公共社会という都市の概念に最も反するものであることは言うまでもない。市民の中には「美しさより飯だ」と言う人がいていいのである。特に今の日本の都市には家もなく生存条件ぎりぎりの水準で生きている人が大勢いる。「心」とはひとりひとりが主体的につくるもので

あって、他人からそのあり様を強制されるものではない。

ここに「心」そのものを考える重要性がある。「美しい」をつくるという目標がまずある。それに皆の心を向けるための仕掛けをつくる。これは制度論の発想で、現実にはそうならざるをえない面もあるが、これは本来話が逆である。人々の心が「美しい」を求める。その結果として「美しい」ができる。これは現象論の発想で、本来はこれが重要である。それは制度論を離れた純粋な現象論として重要である。そして、現象を理解しようとすれば、どうしても哲学が必要になる。

もし人々の心が「美しい」を求めないのであれば、それは人間にとって、あるいは都市にとって、何を意味するのであろうか、などと堅苦しいことを言わなくても「美しい」ということそれ自体に反対する人はほとんどいないかもしれない(自分の利益のために「美しい」を犠牲にする人は大勢いるであろうが)。しかし、それが経済効率性の向上等に替わる目標となることは、人間にとって、都市にとって、何を意味するのか。あるいは、都市には恵まれた人も恵まれない人もいるわけだが、都市のすべての人(ホームレス等も含む)に共通する「美しい」とは何か。このようなことは物をいくら考察してもわからない。心そのものを考察することが必要なのである。

「美しい」方向転換

これまでの経緯に関して、大綱前文では、「経済発展の基盤づくりに邁進してきた」が、「その結果」、「美しさとはほど遠い風景」になった、との認識が示されている。また、大綱本文にも「国土づくり、まちづくりにおいて、経済性や効率性、機能性を重視したため美

しさへの配慮を欠いた雑然とした景観、無個性・画一的な景観等が各地で見られる」と記されている。

このような認識に立って決定したのが、「美しい国づくりに向けて大きく舵を切ることとした」ということであるが、この表現は極めて重要な意味を持っている。その意味とは、舵を切らずに進み方だけを変えるという選択肢を捨て、舵を切り方向自体を変えるという選択肢をとったということである。つまり、過去の方角を否定し、新しい方角を選んだのである。

否定したのは、「経済発展の基盤づくりに邁進」すること、「経済性や効率性、機能性を重視」することであり、選択したのは、「美しい」という方向である。これは画期的な転換である。「経済性、効率性、機能性」の追求を中心課題としたこれまでの方向を変えずに、美しさ等に配慮することによって進み具合だけを調整する、ということでは、ない。「美しい」ということを単なる配慮事項とするような過去の発想を脱したことが何より重要である。「経済性、効率性、機能性」より「美しい」が大きな政策目標となったのである。

「大きく」転換

その転換の仕方は「大きく舵を切る」ということであるから、イメージとしては少なくとも数十度以上の舵を切っているわけで、旧い方向は次第に視野の片隅にかすかに見える程度になっていくはずである。「経済性、効率性、機能性」の追求が全く不要ということにはならないであろうから、それらが視野から完全に消えるところまでは行かないものと思われるが、今や正面に見えるのは「美しい」であって、「経済性、効率性、機能性」は時々

気にかける程度である。これはまさしく大転換である。今後両者のバランスがどの程度になっていくのかはわからないが、「大きく舵を切ることとした」と言う以上、前者が後者を遙かに凌ぐことは間違いないであろう。

2. これからの都市研究

政策の中心課題が経済性・効率性・機能性にあつたことに対応してこれまで都市研究の中心分野は経済学、工学等であつたが、政策の中心課題が「美しい」ということになつた以上中心分野の見直しは必至である。少なくとも従来の経済学、工学等では心に映る「美しい」を解明することはできない。これははっきりしている。

これからの都市研究の中心分野には自ずから美学、哲学、文学、心理学等が加わっていかねばならない。芸術学としての建築学も中心分野になる。社会学、生態学等も重要性を増すに違いない。もちろん経済学、工学等も「美しい」を現実に支えるものとして視点を変えつつ必要性は増していく。

重要でない学問はないわけだが、バランスとしては、技術論や制度論に比し、哲学論、現象論の重要度が著しく高まる。これは制度論や技術論だけが中心だと思ふ人にとってはあまり愉快なことではないかもしれないが、そしてその見方は筆者の見方と全く異なるが、特定の分野への思い入れを捨てて客観的に見れば、「美しい」が目標になつた以上、都市研究の中心の中には哲学論、現象論が入ってくる。

20世紀は技術とデザインの時代であつた(制度はデザインの一部)。それに対応して都市研究では技術論、デザイン論(制度論を含む)がさかんであつた。その時代は終わ

つた。今後、都市研究を充実させていくためには、技術論、デザイン論(制度論を含む)に入る前の段階でじっくりと都市を眺め、考えてみる必要がある。都市のあり様、人間生活のあり様を根源から考えてみなければ、真に必要とされる技術やデザインはわからない。その点に関しては、隈研吾の次の言葉が参考になる。

デザインとエンジニアリングのコラボレーションについても、僕の理想とする状態は、「消える」という状態である。エンジニアリングは天井裏とか、壁の後ろ側に隠れて消えればいいという意味ではない。しばしばこの形で消去したはずのエンジニアリングは、どうしようもなく鈍重なヴォリュームを持つブラックボックスとして最終的に出現し、空間に対して復讐する。消去とは隠蔽ではない。エンジニアリングもデザインも同時に消えてほしいのである。その場所でとり行われる生活の邪魔にならぬように、どちらも同時に消えてほしいのである。

(隈研吾「消えてほしい」)

『建築雑誌』2004年10月号、日本建築学会)

技術論、デザイン論(制度論を含む)が不要ということではもちろんなく、長い目で見ればこれらも含んだ諸学が統合されていくことが望ましいかもしれない。そのような学問形成に一番近いポジションにあるのがどの学問なのかはよくわからないが、どの学問であれ都市学に至るためには研究のあり方を抜本的に見直していくことが求められるであろう。

なお、都市づくりとは、本来人々の福祉水準向上のためにあるものであるから、学問を総合化する上では、これまでハード整備に

比し軽視されてきた社会問題をかなり意識的に大きく扱う必要がある。その学問を通じてホームレス問題、生活格差の問題、所得格差の問題、不公平の問題等がより積極的に議論されていくことが期待されるが、その点ではとりわけ社会問題を重視しているイギリスの政策が大変参考になるであろう。

さて、都市の研究とは本来こうあるべきだななどという規範的な言い回しは、今やそれ自体が時代錯誤を露呈したものになってしまった(それ故本稿もあくまでひとつの考え方にすぎない)。都市の研究は、個々人が試行錯誤しながら新たな地平を切り開く状態に放り出された。その中で何らかの方向性を求めようとすれば、これまで軽視されてきた哲学、美学、文学等が大いなる手がかりになるに違いない。視線を有効にずらすためには、既存の都市関係の学問を一度無にして考えてみることも無駄ではないであろう。

他方、技術論を徹底的に追究するという正反対の方向も挑戦ということでは大きな意義を持っている。制度論も、何がどうしてどうなってしまったのか、今どうなっているのか、これからどうなりそうなのか、という分析を十分に踏まえた上で、かつ、徹底的な議論が許容される形で展開されるのであれば、時間の浪費に終わるということはないであろう。

以上のような認識から、筆者は今後特に哲学、美学、文学等を重視して考察を進めていきたいと考えている。もっとも、それらの分野は筆者のかなり苦手とするところであり、どちらかといえば多少なじみのある制度論、技術論の方に心は傾きがちであるが、それでは都市研究の新しい地平は見えてこない。もちろん旧来の視点からするならば、哲学論のようなものは都市研究ではない、という印

象を持たれるであろうし、筆者自身もいまだそのような考えから完全に脱しきれているわけではないが、そのような迷いを振り切りつつ試行錯誤しながら新しい視点を確保していきたいと考えている。

それにしても、人間は何ゆえ都市づくりといういわば自分たちの巣づくりのようなことすら満足にできないのであろうか。世の中には無限の彼方にまで、また自分の心の奥底にまで未知があるのに、何ゆえ自分たちが生きる日常の空間に関して煩わしい思いをしなければならないのであろうか。そのようなことで悩むのは生の浪費ではないのか。

と考えると、実は都市づくりがうまくいかないのは、世の中の未知に対する思いが薄らいでいるせいではないのか、という考えに行き着く。未知に対する思いが強ければ、つまらない利害関係などで汲々とするはずもない。狭苦しいオフィスの中で「成果」をあげている「エリート」よりも、広々とした公園の中で「生死」を考えている「ホームレス」の方が、人間としてはるかに魅力的に見えるのも、もっともである。

世の中の存在、自分の存在を当たり前と思っているからこそ、迷いが大きくなるのではないか。そう考えれば、まずは「心」の問題を哲学的に扱ってみることが、都市づくりを考える上では何より重要である。例えば、世の中で価値があると思われているもの、必然と考えられているものを徹底的に疑い、偶然と必然とは紙一重ということがわかってくると、それが今日の都市問題を解く鍵になるかもしれない。そして都市の風景はその鍵を発見する契機になるかもしれない。

3. 「美しい」とはなにか

「美しい国づくりに向けて大きく舵を切ることとした」と言う大綱には「美しい」の定義はなく、舵を切る方向にある「美しい」の具体的内容はどうもわからないが、「美しい」は普通の人間にとっては大変距離がある概念であるから、それはやむを得ないことであろう。筆者にとっても「美しい」は無限の彼方にあり、程よい距離感の他の言葉がないものかと思ったりもする。したがって以下は「美しい」がよく分からないまま記述するのであるが、実のところ大綱が「美しい」と言う言葉を掲げたことには天地がひっくりかえるほどの大変な事態が潜んでいる。それを感じ取るためには、ここで少々無理をしてでも「美しい」を考えてみなければならぬ。

とは言っても、筆者が「美しい」説明を簡単にできるわけもないので、以下に橋本治の卓見を引用したい。

「“美しい”が分かる」というのは、「美に関する知識の獲得」ではありません。「コレコレが美である」という境界を明確に定めて、「その正解を数多く記憶することこそが美の理解だ」という教育がありますが、私は賛成できません。「分からなければ美ではない」と、私は考えます。私は、「各人が“美しい”と感じたそのことが、各人の知る“美しさ”の基礎となるべきだ」と考えていて、「“美しさ”とは、各人がそれぞれに創り上げるべきものだ」と考えています。(中略)

人は、まず恋をして、その後で、自分の恋した相手がどんな人物かを知ろうとします。他人に関するデータだけを集めて、そのデータに恋をして、「恋」を前提にしてその相手に会うというのは、恋なんかではありません。それは、「自分の幸福に対する打算」です。(中略)その

相手のことをなにも知らないまま、「この人は自分にとって必要な人物だ」と直感してしまう - それが恋です。「美しい」という感動も、それと同じです。(中略)その「必要」を大づかみに取り込んでしまうための指標が、「美しい」という実感なのです。(中略)

「美しい」に関する直感の訪れは、ある意味で「襲撃」です。「美しい」は、思考を混乱させ、停止させてしまうのです。(中略)「なんでも自分で決めて、自分に関するすべてのことにイニシアティブを取ってほしい」と思う人にとって、こんなことはいやでしょう。(中略)だからこそ、「この停止の時間を短くしたい。排除してしまいたい」と思うのです。(中略)

こういう人達には(中略)「理解力」だけがあって、「類推能力」がありません。「分かることは分かるが、分からないことは分からない」で終わりです。どう終わりにするのかと言えば、「分からないことは扱しようがないから排除する」で終わりです。「分かること」だけ分かって、「分からないこと」は、排除されて存在しません。(中略)

こういう人達は、説明されなければ分かりません。類推能力に欠けているからです。だから、「説明をしろ！説明をしなれば分からない！」の一点張りで、「説明の出来ない相手の胸の内」なんて分かりません。「説明出来ないままに相手の胸の内」が分かる人なら、「美しい」だって分かります。(中略)理性的で合理的で意志的で主体的であることが好きで、それゆえに「美しい」が分からない人というのは、「自分の都合だけ分かって、相手の都合が理解できない」という、いたって哀しい人なのです。

「美しい」は、直接的にはなんの役にも立たない発見です。(中略)直接的にはそうですが、

しかし、「美しい」には重大な役割があります。それは、「自分とは直接に関わりのない他者」を発見することです。

直接的には関係がない - しかし、それは存在する。「関係がない」という保留ぐらみ、「存在する他者」を容認し、肯定してしまう言葉 - それが「美しい」なのです。もちろん、この「他者」には、「ゴキブリ」とか「小石」といったものまで含まれます。

(橋本治『人はなぜ「美しい」がわかるのか』

ちくま新書、2002年)

この説明が端的に示しているように、政策の主目標を「美しい」にするということは、方法論的な大革新を伴うものである。制度論的、技術論的アプローチでは「美しい」の本質に迫ることができないのは当然のこととして、その他の理性的、合理的なアプローチでも迫ることができない。このような「美しい」を政策の主目標にしたということは、先にも述べたように、天地がひっくりかえるほどの大変な事態なのである。

要するに、「美しい」を考える前に、考える側のモノの見方をひっくりかえすことが、「美しい」を扱うための大前提となる。我々は今やモノを見ずに心を見なければならぬ。モノは心で見なければならぬ。我々は目玉の向きをひっくりかえす運動をしなければならぬ。これは、痛い。運動により筋肉に相当の痛みを伴うであろう。

政策目的を大転換したとは言っても、世の中にはまだまだ古い考え、経済中心の考えにこだわる人間もいる。一種の既得権益、旧体制をまもろうとする考えがある。我々はそのようなものを排除しながら前へ進まなければならぬ。これも相当な痛みを伴う。摩擦

により皮膚に相当の痛みを伴うであろう。

要するに、制度論、技術論の入り口の手前には、克服しなければならない長く苦しい自己改革の期間があるのである。この期間を省こうとするとどうなるか。「美しい」を突き詰めて考えずに「美しいもの」を作ろうとすれば、古い考えと適当に妥協しながら作ろうとすれば、どうなるか。橋本治は次のように述べる。

昔には「簡単に作れる」という質の技術がありませんでした。だから、ものを作る人間は、時間をかけるしかありませんでした。(中略)「作る」という行為は、葛藤の中を進むことなのです。「ものを作る」という作業は葛藤を不可避として、葛藤とはまた、「時間」の別名でもあります。「時間をかける」とはすなわち、「自分の都合」だけで生きてしまう人間の、「思い込み」という美しからぬ異物を取り去るための行為なのです。(中略)

ところが人間はある時、この「時間がかかる」を、「人間の欠点」と思うようになりました。(中略)「人間の技術」を機械に移し換えようとしたのです。(中略)機械化による大量生産は、(中略)ためらいぬきで、「観念」が現実化してしまうということです。(中略)

ためらいながら、その「ためらい」を克服しつつ、「作る」の道を進むのが人間です。しかし、機械に「作る」をまかせてしまった人間は、そのことがよく分からなくなってしまいました。だから、人の住む町は、「これは美しいはず」「合理的であるはず」「機能的であるはず」という、「観念がそのまま形になってしまった物」に侵され、それを修正することも出来ぬまま、「美しくない物」を氾濫させているのです。

「産業がどうだ、経済がどうだ」と言われても、これは、人間のあり方、自然のあり方に対して

の違いです。「美しいを分かる」を回避した結果の時間的短絡が、この違いを生みます。(中略)

残念ながら、「美しい」という事態は、人間の利害からはずれていません。利害からはずれていることが「美しい」で、利害の中に「美しさ」を見る人は、ただ「利害」だけを問題にしているのです。(中略)「合理的だから美しい」のではなく、「思惑を超えた自然だから美しい」なのです。(同)

人間の観念だけで作られたものからは「美しい」は生まれません。「思惑を超えた」から「美しい」のである。つまり「標準化」、「規格化」等と「美しい」は矛盾する。「計画どおりの美しさ」などというのは、かなり変な事態である。

ところで、橋本治が説明する「美しい」の「役割」は、筆者が考えている風景の役割とほとんど同じである。そのため、「都市の風景」とは「美しい」と同じくらい「分からない」ことなのである。しかし一方、「美しい」が分からないなどとは、はっきりとは言いにくい。そこで、「どうも、わからない」になる。「都市の風景」の本質に迫る、極めて率直で真面目な感想である。

4. うろこの研究

都市とは自分たちの人工だという思いこみがある。したがって都市の「美しい」も技術や制度で理解してしまおう、解決してしまおうという気持ちが生じてくる。そこに大きな問題があることに気がつくことが、「美しい」を扱うための必須の条件である。これは、都市の風景を論じる上でも最も重要なことである。

政策目標を「美しい」にするのであれば、

制度論、技術論からとりあえず脱して「美しい」そのものを考えることが必要である。別稿「都市の風景に関する研究」のねらいも都市の風景そのものを考えるところにある。そして「風景」は「美しい」と同じくらい難しい。それは、風景の核心に美しいという要素があるためであり、美しいということを論理的に簡潔に語るができないからである。おそらく都市研究の分野では今後そのような類の研究が増えていく。増えていかなければならない。したがって、これからの都市研究の関係者には忍耐が必要である。都市の中や都市の外をあちこちと歩き回り、関係しそうなことをあれこれと時間をかけて考えているうちに都市が感覚としてようやくわかっていくという状態に至り、次により論理的なまとめに入ることができる。

読者の立場で言えば、筆者の書くものなどは単なる手がかりのひとつとして扱うべきで、後は自分でゆっくりと考えることに意味がある。要領よく知識だけを吸収しようとする読者には、筆者の書き物などはあまり意味のあるものではないであろう。多分、訳のわからないことを書くなということになってしまうはずである。

以上のような次第で、筆者は試行錯誤を繰り返しながらふらふらと都市研究の野を前に進んでいく。それが山頂に至る道なのか樹海の中の道なのかは、今のところ不明である。なるべく早くそれなりの展望を得たいとは思っているが、暫くの間は暗中模索を続けていくことになりそうである。

そのような模索を続ける上で最も重要なことは、形式にこだわらないということである。都市研究の内容はこうあるべきだ、研究の文章はこうあるべきだ、などという形式に囚われ

ていてはいつまでたっても新しい展望は開けてこない。暗中に座り込んでそのような論議をしている暇があるなら、ともかくも先に進むことが、少なくとも「美しい」の都市研究に関しては有効である。この点に関しては、猪木武徳が映画「ボウリング・フォー・コロンバイン」とそれを監督したマイケル・ムーアについて次のように書いていることが参考になる。

自分は大学を卒業しなくてよかった、大学で論文の書き方の作法をたたきこまれていたら、構成ばかり気になり、恐らく新しいことを見つけられなかった、とムーア監督は述べている。思い込まずに、人に尋ね、話してもらい、さらに尋ねるといふ「発見的方法」の大切さを改めて教えてくれる映画である。

(猪木武徳「聴いて、知る」

日本経済新聞2004年4月27日夕刊)

論文の何たるかに関しては養老孟司も次のように述べている。

最近の学生を見ていて思うのは、ひっかかることがあっても、それを頭のなかで「丸めてしまう」傾向が強いことである。(中略)「そういうものだ」と思ってしまえば、疑問は生じない。本人は楽だが、楽をすれば、なにも考えない。(中略)

科学者になろうとする若者が、まずしなければならないこととはなにか。「論文を書くこと」である。(中略)論文とはなにか。生きものを情報化したものである。情報は生きものではない。止まったものである。論文を百万集めたって、大腸菌一つできない。システムは構築できないのである。(中略)論文は死ぬほど出る。でも全体がどうなっているか、だれにもわからない

のである。

情報化するというのは、脳の外にあるシステムを脳の中に入るようにすることである。脳の中に入れば、シミュレーションできる。シミュレーションとは「ああすれば、こうなる」ことである。違う風にすれば、違う風になる。それを繰り返して、自分にとっていちばん都合のいい例をとればいい。(中略)

つまり「どうしたらいいか」という質問は、シミュレーションが成り立つことを前提にしている。(中略)「どうすればいいのか」と質問する人の考え方が問題なのである。(中略)そもそも独立した大人が、「じゃあ、どうすればいいんですか」と、他人に訊くこと自体が変だと気づくべきなのである。(中略)自分で目のうろこを落とせ。私はそういいたい。

(養老孟司『いちばん大事なこと』

集英社新書2003年)

「美しい」とはシミュレーションが成り立つことを前提とした既存の分析的な都市研究論でわかるはずのものではなく、それがわからなければ都市づくりの目標もわからない。まずは研究のうろこを落とさなければならない。そのためにはうろこの研究をしなければならない。それが哲学である。

おわりに

以上は「美しい」を新しい都市づくりの目標として考える場合の話である。「わけのわからない「美しい」など認めない」という頑固な考えも美しいかもしれないが、今後そういうことも含めて「美しい」を考えていくことが大切である。